

はじめに

本書は、現代哲学において原子力の問題がどのように論じられてきたかを紹介するものである。

二〇世紀の半ば以降、多くの哲学者が原子力について独創的な考察を行い、さまざまな論点を提示しながら議論を展開してきた。そうであるにもかかわらず、これまで「原子力」が哲学のキーワードとなったり、主要な問題圏として扱われたりすることはなかった。また、原子力だけを自らの主要なテーマに設定した哲学者が多くいるわけでもない。多くの哲学者は、いわば「看板」となる自分の主要な思想を確立した後で、そうした思想と関連する周縁的な問題として、原子力について論じているからである。

しかしそれは、原子力をめぐる議論が些末さまつなものに過ぎない、ということの意味するわけではない。原子力について論じた哲学者は、原子力の問題を自らの主要思想によって解釈し、またそのうちに位置づけている。ある哲学者が原子力をどのように論じているのか、ということからは、その哲学者がどのような世界観や人間観のもとで原子力を捉えているかが、如実に明

らかになっていく。原子力をめぐる哲学の議論において論じられるのは、原子力の脅威にさらされた世界はどのようなものなのか、そうした世界に生きる人間はどのように存在しているのか、という問いなのである。

これが本書の焦点となる問いである。本書は、原子力をめぐる思索を通じて、あくまでも世界と人間を問うていく。それこそが、翻って、原子力について哲学的に思考することに他ならない。

ただし、本書は「原子力の哲学」という一つの壮大な理論を打ち立てるものではない。そうではなく、それぞれが原子力に関する個性的な分析を残していった、主要な哲学者たちの思想をアンソロジーのように解説していく。登場するのはヨーロッパを中心とする七名の哲学者であり、一章につき一人の哲学者を紹介する、という構成をとる。順番に名前を挙げるなら、マルティン・ハイデガー、カール・ヤスパース、ギュンター・アンダーズ、ハンナ・アーレント、ハンス・ヨナス、ジャック・デリダ、ジャン＝ピエール・デュピュイである。

この七名の哲学者の間には思想的に密接な影響関係がある。そしてそれが、本書がこの七名をあえて取り上げる理由でもある。本書は、「原子力の哲学」をバラバラで断片的な思想の集積としてではなく、一つの歴史的に形成されてきた問題圏として解釈していく。それによつ

て現代思想の地図に新しい線を引くこともまた、本書が意図していることである。

もつともそれは、この七名の哲学者の間に何か共通している見解がある、ということの意味するわけではない。むしろ読者は、この七名がそれぞれいかに多様な視点から原子力を論じているかに、驚かれることだろう。原子爆弾と原子力発電、本当に脅威なのはどちらか。人間の生命が奪われることと、人間の自由が奪われること、どちらが本当に避けるべきことか。そうした基本的な立場からして七名の哲学者は一致していない。本書はそうした思想の間の優劣を評価するのではなく、多様なものをあえて多様なまま提示することにした。その多様性こそが、原子力の問題への視点がもつさまざまな可能性であり、「原子力の哲学」の豊かさであるからだ。

ところで、そもそもなぜ、原子力に関する「哲学」が必要なのだろうか。原子力の問題はあくまでも科学的・技術的な問題であり、それぞれの分野の専門知によって解決されるべきものではないだろうか。そこに哲学者が口を挟むことに何の意味があるのだろうか。

こうした疑問は当然のものだろう。そして、本書で取り上げる哲学者たちも、この疑問に対して、つまり自分がなぜ原子力の問題を論じるのかについて、それぞれの答えを示している。

とはいえ、まずここで本書の見解を先に示しておこう。

「原子力の哲学」は必要である。なぜなら、科学的・技術的な言説で原子力を語ることに限界があるからだ。

二〇一一年三月一日、福島原子力発電所事故が起きた後、日本の知識人の多くがそうした限界を自覚するようになった。たとえば哲学者の東浩紀あずまひろきもその一人である。東は、福島第一原発事故において放射能と健康被害の因果関係を説明することが困難であると指摘し、次のように述べている。

しかし、因果関係がどうであろうと、原発事故によって傷ついたひと、生活の場が奪われたひとがたくさんいることはまちがいない。そして、そのような「科学的には言語化できない」痛みを言葉に置き換えていくのも、また哲学の役割です。かつてヨーロッパの知識人たちが、アウシュヴィッツという表象不可能な体験、つまり「言葉にできない体験」を言葉にすることに尽力したのと同じように、ほくもまた、たまたまではあれ福島第一原発事故のような大きな事件に遭遇したからには、似た責務を負っていると考えています。

（東浩紀『弱いつながり―検索ワードを探す旅』幻冬舎文庫、二〇一六年、六三一―六四頁）

ここで東は、原発事故が「科学的には言語化できない」ものをもたらしたと指摘し、それを「アウシユヴィッツ」という表象不可能な体験」に重ね合わせている。福島第一原発事故は、私たちの言語の処理可能性を超える出来事であった。しかし、その出来事に言葉を与えることができなければ、その出来事はなかったこと、はじめから存在しなかったことになってしまう。もちろん福島第一原発事故は起きている。その事実是不変ならない。しかし、それによって「傷ついたひと、生活の場が奪われたひと」の抱える「痛み」は、簡単に忘れ去られてしまう。それは科学的な語彙では説明できないし、また「表象不可能」なのである。

それに対して哲学は、そうした、それまで語りえなかったものを語りえるようにすることで、出来事を現実のうちに組み込むことができる。それによって私たちはそこで何が起きていたのか、どんな痛みを抱えていた人々がいたのかを、理解できるようになる。東はここに哲学の可能性を見出し、表象不可能な出来事を「言葉にすること」のうちに、哲学の「責務」を洞察している。

本書が「原子力の哲学」が必要だと考えている理由は、こうした東の立場と通底している。私たちは現実を言語で理解している。現実には大きな破局が起きるとき、私たちはそれまでの言

語で自分が直面している現実を説明できなくなってしまふ。それによつて、あるときには現実からリアリティが失われ、あるときには大きな混乱に陥る。それに対して哲学は、そうした語りえないものの言語化を通じて、私たちに現実を理解可能にする力をもつ。それが科学的・技術的な専門知ではなく、哲学の専門知が担うことのできる役割に他ならない。

私たちの社会は、核兵器にせよ、原子力発電所にせよ、原子力の脅威にさらされている。そしてそれはこれからもしばらく続くだろう。そうした状況において、起こりえる破局に対して備え、それを回避し続けていくために、私たちは自分たちが置かれている現実を理解しなければならぬ。

原子力は言語化不可能な出来事を引き起こす。言語化できないものは現実を理解不可能にする。それに対して、哲学は言語化できないものを言語化し、現実を理解可能にする。だからこそ「原子力の哲学」が必要である。それが本書の立場だ。

いくつか、一般的な注解をしておきたい。

本書は「原子力」という言葉を、ウラン鉱石に含まれるウラン二三五を核分裂させることによつて放出される、膨大なエネルギーを活用したテクノロジーの総称として用いることにする。

したがって、原子力をめぐる問いには、原子爆弾、水素爆弾（熱核兵器）、原子力発電所などをめぐる問いが含まれていることになる。原子力の哲学の対象は、これらの個々のテクノロジではなく、むしろその原理となっている膨大なエネルギーの放出と、それへの人間の関わりである。

また本書は、「原子力 atom」と「核 nuclear」を互換的に用いる。それぞれの呼称を採用する根拠は、取り上げている哲学者がどちらを主に使用しているかに依存する。たとえばハイデガーは「原子力」という表現を頻用している一方、デリダは「核」という表現を頻用するが、本書は両者を同じ対象を指す概念として解釈する。このように断っているのは、「原子力」と「核」が日本語においては異なるニュアンスで用いられ、前者が原子力発電などの平和的な技術に、後者が核兵器などの軍事的な技術へと割り当てられるからだ。こうした使い分けは、言葉から喚起される印象を分断し、原子力発電のクリーンなイメージを保つために、恣意的に行われている。しかし、本書が「原子力」と「核」を使い分けるのはこうした日本的な用語法に従うためではない。ヨナスを取り上げる際にそうなるように、兵器をめぐる問題を念頭に置いて「原子力」という言葉を用いることもある。

前置きが長くなった。さっそく本論に入るとしよう。

「原子力の哲学」へ、ようこそ。

文献の引用は、邦訳書のあるものについては基本的にそれを用いたが、用語の一貫性や読みやすさなどを考慮して字句を適宜改めたり新たに訳出したりしたものがある。引用中の「」は邦訳書または筆者による補足である。